

五十四年から二年間）を務め、指導的役割を果たした。通商産業省（現在の経済産業省）管轄の平石炭事務所に長年勤務したこともあって、炭鉱労働者に深い理解を示し、編著書に『常磐炭田戦後坑夫らの歌』（昭和四十九・七 いわき歌話会）がある。二〇〇六（平成十八）年、八十八歳で死去。

第一歌集『極光の下に』は、「凍港」「極光の下に」「恵風集」の三つの章から成っている。「凍港」は満州に滞在していた昭和十六年十二月から昭和二十年八月までの作。「極光の下に」は昭和二十年九月から昭和二十三年九月までシベリア抑留中の作。「恵風集」は復員後の昭和二十三年九月から昭和四十二年九月までの作を収める。第二章の「極光の下に」は全部で一六八首あり、「武装解除」「郭化收容所へ向ふ」「入国旅情」そして「收容所雑詠」が「一」から「十四」までの計十七の連作が収められている。

・两眼は流れ蛆わく兵をすら見るのみにして曳かれきにけり  
・銃聲に列みだしたる雁は遠くなりつつ並みわたりゆく  
「郭化收容所へ向ふ」より二首引いた。

囚われた大内らの隊はまず最初に敦化收容所へ向かった。「敦化」は現在の中国吉林省延辺朝鮮族自治州敦化市。（「郭化」とあるが、「敦化」の誤りだと思われる。）一首目、連行される身にとつて、同じ日本兵の無惨な姿をただ見ることしかできなかった無念さが伝わってくる。二首目、銃声に列を乱しながらもまた列をなして飛んでゆく雁に自分たちの運命を重ね合わせて見ていたのだろう。

・携行食に受けしざらめの乏しきを掌の窪にのせ愛しむわれは  
・貨車とまるたびにこぼるる爐の汁をのしれどまた深き沈黙  
・バラライカかき鳴らす朝の音楽が貨車とまるとききこゆチタ驛  
「入国旅情」より。中国からソビエトへと身柄は荷物のようにシベリア鉄道の貨車で移された。最終的に送られることになるタイシエツトと敦化收容所との間は約二千キロ離れている。タイシエツトはイルクーツク州にある町。町の名の由来がケツト語で「冷たい川」の通り、最低気温はマイナス四〇度を下回り五〇度近くに達する。

一首目、携行食として配られた貴重ならめを愛おしむ作者。食事はとにかく死なないように最低限の量しか与えられていなかった。二首目の「深き沈黙」に、自分たちがどこに連れていかれるかわからない底知れぬ不安が伝わってくる。三首目、「バラライカ」はロシアの代表的な弦楽器。異国の楽器が奏でる音楽がきこえてきて、いっそうその不安が増幅されただろう。

收容所生活はどんなものだったのか。「收容所雑詠」の作品から辿っていきいたい。

・凍りたるパン切りなづむ手許にて咽喉の唾を嚙みおろす音  
・松の皮焼きて甘きを噛みぬたり遠く鰯をわれは戀ひつつ  
・石塊いしぐらに似て凍りたる馬鈴薯さつまいももいやしくなりて我等はひろふ

まずは食生活。一首目、凍った黒パンを切りなづんでいる自分の手許を見つめて仲間が唾を嚙みこむ音が鳴る。緊迫した場面が聴覚で捉えられている。二首目、日本でよく噛んでいた鰯を恋いながら松の皮を噛んでいる。何ともやりきれない甘さだ。三首目、自らを「いやしくなりて」ととらえる。自己のありようを冷静に見つめている歌だ。「いやしく」ならなければ「我等」

らめを愛おしむ作者。食事はとにかく死なないように最低限の量しか与えられていなかった。二首目の「深き沈黙」に、自分たちがどこに連れていかれるかわからない底知れぬ不安が伝わってくる。三首目、「バラライカ」はロシアの代表的な弦楽器。異国の楽器が奏でる音楽がきこえてきて、いっそうその不安が増幅されただろう。